鉄道員の復讐

アミーリア・エドワーズ

彼の名前はマシュー・プライスで、ぼくはベンジャミン・ハーディ、お互いに生まれは数日違いで、同じ村で育ち、同じ学校で教育を受けた。ぼくらが親友でなかった時など、思い出そうにも思い出せない。少年の頃でさえ、喧嘩をした経験が一度もなかったからである。ぼくらはいつも同じことを考え、同じものを一緒に使っていた。お互いのためであれば、何も恐れずに死ぬまで味方をしたであろう。それは物語本の中で時々お目にかかるような友情――ぼくらが生まれた荒れ地の大きな岩山のように微動だにしない、大空の太陽のように変わることのない友情――であった。

ぼくらの村の名前はチャドリーといった。巨大な緑の湖のように足元に広がる牧草地の平原よりも、この村は高い所にあった。そして、この平原とさらにその上の高原とのちょうど中間地点に、風雨に守られた窪地に埋もれるように、ちっぽけな石造りの部落が存在していた。頭上には山の尾根や斜面が連続してそびえ、荒れ地からなる山岳がずっと広がっている。そこは所々に耕作地や耐寒性の植林地があるものの、たいていは草木のない荒涼とした土地であった。また、一番高い頂上には巨大な、ごつごつした、険しい孤高の岩山が、ノアの大洪水[1]よりも古くからあるかのように、白色化した姿で鎮座している。これは、岩山、ドルイド[2]の岩山、王様の岩山、城の岩山などの名称で呼ばれている。聞いた話によれば、太古の昔は神聖な場所だったようで、戴冠式、火あぶりの刑、人間のいけにえ、その他、あらゆる種類の血なまぐさい異教の儀式が行われていて、そこでは人骨、矢

じり、金やガラスの装飾品も見つかったそうである。少年時代のぼくは、この岩山に漠然とした畏怖の念を抱いていた。だから、たくさんの金銭をもらったとしても、日が暮れてから近寄るなんてことは敬遠したことだろう。

すでに述べたように、ぼくらは同じ村の生まれであった。彼はウィリアム・プライスという小作農の息子で七人兄弟の長男、ぼくはチャドリー村の鍛冶屋エフライム・ハーディの一人息子だった。ぼくの父はチャドリー村では有名人であり、今でも人々の記憶にちゃんと残っている。一般に農夫は鍛冶屋よりも偉いと思われているが、保有地がわずかなのに子供が七人もいたウィリアム・プライスは、実際には多くの日雇い労働者のように貧しかった。一方、ぼくの父は裕福で、仕事も多く、人気もあり、気前のよい鍛冶屋で、この地方ではひとかどの有力者であった。しかしながら、こんなことはマットとぼくには何の関係もない。彼の上着は肘のあたりに穴があいていたとか、ぼくらの相互資金は全部ぼくのポケットから出ていたとか、そんなことが二人の頭に浮かんだことは一度もない。学校の同じベンチに座り、同じ初歩読本を使って課題をこなし、お互いの喧嘩の助太刀をし、過失をかばい合い、一緒に魚を釣り、木の実を採り、学校をサボり、果樹園のフルーツや鳥の巣を失敬するだけで、ぼくらにとっては十分だったのだ。正規の休みであろうと、ズル休みであろうと、三十分でも時間があれば、ぼくらは必ず一緒に過ごしたものである。

本当に楽しい少年時代だったが、それが永久に続いたわけではない。ぼくの父は裕福だっ

たが、息子を早く世間に出すことに決めていたからだ。父より多くの経験をして、より成功しなければならなかったのである。ぼくにとって鍛冶屋はふさわしい場所ではなく、チャドリーの小世界も狭すぎると言われた。そういうわけで、ちょうどマットが口笛を吹きながら田畑を耕していたころ、ぼくはまだ肩かけ鞄を振りまわして学校に通っていたのだが、とうとうぼくの運命も定まって、二人は別れることになった。当時は永遠の別れになるような気がした。というのも、カエルの子はカエルであり、ぼくは何らかの形で炉を使う鉄工の仕事が気に入っていて、現場の技師になることに決めていたので、やがて父がバーミンガムの鉄工場主にぼくを弟子入りさせたからだ。それで、ぼくはマットとチャドリー村、そしてその陰のもとで今まで全人生を送ってきた灰白色の岩山に別れを告げ、北部の「ブラック・カントリー」(3)に向かって出発したわけである。

ぼくの話のこの部分について詳しく述べるつもりはない。必死に働いて徒弟期間を終えたこと、年季を完全に勤めて熟練工となったあと、マットを田畑から引き離してブラック・カントリーに連れてきて、下宿、賃金、経験――要するに、ぼくが彼に与えることのできる全部――を共有したこと、生まれつき飲み込みがよくて静かなる闘志にあふれていた彼は、努力して出世の階段を一段ずつ昇りながら、やがて彼自身の部署で「一流の職人」となったこと、この長い年月の間に転地と挑戦と努力を繰り返しながらも、ぼくらの少年時代からの友情は決して揺らぎも弱まりもせず、ぼくらの成長とともに育まれ、ぼくらの体

力とともに強化されたこと、そういった事実はどれもこれも、ここでは概略を述べるだけで十分である。

この頃だったであろうか――マットとぼくが三十歳の峠をまだ越えていなかった時期について話しているのだが、そのことは記憶に留めておいていただきたい――たまたま、当時トリノとジェノヴァの間に建設中だった新しい鉄道で走らせるために、ぼくらの会社は最高級の機関車を六両も供給する契約を結んだ。それはイタリアから受けた初めての注文である。フランス、オランダ、ベルギー、ドイツとはすでに取引があったが、イタリアとはなかったので、この国との新しい関係は価値があった。アルプスの向こう側の隣人たちは最近ようやく鉄道の敷設を始めたばかりで、線路が延びるにつれてイギリス人の立派な仕事がもっと必要となるに違いないので、余計に価値があったのだ。それで、バーミンガムの会社は今回の契約に本腰を入れ、ぼくらの労働時間を延長し、賃金を上げ、新たに職人を雇い、やる気と迅速さによって可能であれば、イタリアの労働市場のトップに立ち、そこに留まる決意を固めていたようだった。六両の機関車は納期どおりに生産されただけでなく、船に積まれ、輸送され、ピエモンテ地方[4]の荷受人たちをかなり驚愕させるほどの迅速さで配送された。それら機関車の輸送の監督者にぼくが任命されたとき、少なからず鼻高々だったことは確かである。ぼくは二人の助手の採用を許されたので、その一人がマットになるように手を打った。こうして、ぼくらは人生で初めてとなる楽しい休暇を一

緒にとることになったわけである。

この休暇は、ブラック・カントリーのバーミンガムから来たばかりの二人の職人にとって、すばらしい気分転換になった。背後には三日月形のアルプス山脈がそびえる美しい都市、異国の船で混雑した港、すてきな青い空とさらに青い海、桟橋の上にある色あざやかな家々、白と黒が混ざった大理石で正面を仕上げた古風で趣(おもむき)のある大聖堂、アラビアン・ナイトの商店街のように宝石店が立ち並んだ通り、ムーア様式[5]の中庭や噴水やオレンジの木々のある豪華な建物が連なる街路、花嫁みたいに顔をベールで隠した女性たち、二人ずつ鎖につながれたガレー船[6]の奴隷たち、司祭や托鉢僧の行列、ガラーンガラーンと鳴り続ける鐘の音、ガヤガヤした異国の言葉、異常なほど明るく晴れやかな気候。これらの組み合わせは、それはもう驚嘆すべきものだったので、休暇の初日に何だか混乱した夢でも見ているかのように、ぼくらは縁日に行った子供よろしく浮かれた気分で歩いていた。それで、この土地の美しさと気前のよい給料に魅了された二人は、最初の週が終わらないうちに、バーミンガムには永久に背を向け、トリノ・ジェノヴァ鉄道会社に骨を埋めることで意見が一致した。

それから新しい生活が――とても活気のある、健康的な、新鮮な空気と日光にあふれた生活が――始まったので、時折、よくあんな陰鬱なブラック・カントリーに我慢できたなあと驚いたものだった。ぼくらは絶えず鉄道を行ったり来たりしていた。時にはジェノヴァ

で、時にはトリノで、機関車の試験運転をしながら、新しい雇い主たちのために昔の経験を役立てていたのである。

そうこうするうちに、ぼくらはジェノヴァを本拠地に定め、波止場に通じている坂の路地にあった小さな店の上に二つの部屋を借りた。それはとても人通りの多い、険しくて曲がりくねった路地だったので、馬車は通り抜けができなかったし、とても狭かったので頭上の空が長細い群青色のリボンにしか見えなかった。しかし、その路地の家という家はすべて店になっていて、そこでは商品が歩道を侵略したり、ドアの付近に積まれていたり、壁かけのようにバルコニーから吊り下げられていた。そして、日がな一日、夜明けから日暮れまで、陸続として絶えない大勢の通行人たちが、港と山の手の間の坂道を上ったり下ったりしていた。

ぼくらの下宿の小母さんは銀細工職人に先立たれた未亡人で、銀線細工の装飾品、安っぽい宝石、櫛、扇、象牙や黒球で作った玩具などを売って生活していた。彼女には店を手伝っているジアネッタという名の一人娘がいて、この娘はぼくが今まで見た中で文句なしに最高の美人だった。今までの辛かった長い年月の隔たりを飛び越えて当時を振り返り、できるだけ鮮明に彼女の姿形を思い浮かべてみると（今もできるし、実際にしているわけだが）、今でさえ彼女の美しさに欠点を見出すことができない。彼女の美しさを説明するのはやめておこう。言語を駆使して説明できるような詩人が今の世の中にいるとは思えな

い。しかし、彼女に少し似ている（彼女の半分も美しくはなかったのだが、それでも似てはいた）絵[7]をかつて見たことがある。おそらく、その絵はぼくが最後に見た場所に――ルーブル美術館の壁の上に――今でもかかっているだろう。その絵に描かれていたのは茶色の目と金髪の女性で、顎鬚（あごひげ）をたくわえた背景の男が右手に持っている丸い鏡を肩越しにのぞきこんでいた。その時に思ったのは、画家はこの男の中に自画像を、彼女の中に自分が愛した女性の肖像を描きこんだのではないかということだった。その絵は今まで見たどんな絵よりも美しかったのだが、ジアネッタ・コネグリアと比較すると、同日の談ではなかった。

この未亡人の店がお客に事欠くことは確かになかった。あの黒ずんだ小さなカウンターに行けば、絶世の美女を拝顔できると、ジェノヴァ中の男たちが思っていたのだから。ジアネッタは浮気女であったが、名前さえ思い出せないほど、大勢の恋人がいた。身分の貴賤を問わず、金持ちも貧乏人も、耳飾りや魔除けを買って行く赤い帽子の船乗りから、窓に展示した銀線細工の半分を無頓着に買ってくれる貴族に至るまで、彼女はみんなを同じようにあしらっていた。その気にさせたり、笑い飛ばしたり、自分の好きなように相手を押したり引いたりしていたのだ。彼女に愛する心がないのは大理石の彫像と同じことで、やがてマットもぼくも気づいたように、そのせいでひどい犠牲を払うことになってしまった。

ぼくは、どうしてあんなことが起こったのか、どうして最初にぼくが二人の状況の変化に気づいたのか、今もって分からない。しかし、その年の秋が終わるずっと前から、マットとぼく自身の間には冷ややかな雰囲気が漂うようになっていた。それは言葉で表わすことができない雰囲気――ぼくらのどちらにせよ、どうしても説明できない、どうしても弁明できない冷ややかな雰囲気――であった。ぼくらは以前のように一緒に下宿し、一緒に食事し、一緒に働いていた。一日の労働が終わったあと、夕暮れの長い散歩ですら一緒にしていたので、おそらく、お互いに前よりは寡黙になったことを除いて、単なる傍観者であれば、変化の「へ」の字も読み取れなかったであろう。とはいえ、実際に変化が生じ、そっと知らぬ間に、ぼくらの間の溝を日毎に広げていたのである。

それは彼の過失ではない。誠実で心やさしい男だったから、そんな事態を自ら進んで引き起こすようなことはなかった。それはぼくが――確かに激しやすい性格であったが――悪かったからだとも思わない。最初から最後まで、すべては――罪も恥も悲しみも――彼女のせいだったのである。

二人のどちらを好きか、彼女が公然と示してくれていたなら、何らの実害も生じはしなかったであろう。ぼくは、実際にマットが幸せであれば、いかなる制約でも自分自身に課しただろうし、（神様だけが御存じだが）いかなる苦しみも我慢しただろう。ぼくのためであれば、彼だって同じことを――できることであれば、それ以上のことを――してくれ

たはずだ。だが、ぼくら二人に対するジアネッタの愛情は一文(スー)[8]の値打ちもなかったし、どちらかを選ぶつもりも彼女にはなかった。ぼくらの仲を裂いて虚栄心を満たし、もてあそんで楽しんでいたのではないだろうか。人に気づかれない微妙な媚態(こび)を何度も売ることで――すなわち、流し目、秋波、思わせぶりな言葉によって――ぼくらをうまく恋のとりこにし、ぼくらの心を苦しめ、自分を愛するように仕向けた時の彼女の手練手管については、とても言葉では説明できない。彼女はぼくらを両方ともだましていたのである。希望を持たせてウキウキさせたかと思えば、嫉妬で気も狂わんばかりにし、ぼくらを絶望で打ち砕いたのだ。ぼく自身はどうだったかと言えば、ふと我に返って、ぼくらの行く手に身の破滅を招く落とし穴があることに気づくことがあった。これまで二人の生活を結びつけてきた正真正銘の友情がいつの間にか崩壊の危機に瀕していると分かったとき、ぼくは自分自身に問いかけてみた――マットにとってのぼく、ぼくにとってのマットほどに価値のある女性が、この世にはたしているだろうか、と。しかしながら、そう頻繁に自問したわけではない。真実を直視せずに、むしろ見て見ぬふりをしがちであった。そうした夢うつつの中で自己欺瞞の生活を送っていたのである。

こうして秋が過ぎ去り、冬が――常緑のオリーヴとモチノキ、キラキラと輝く陽光、身を切るように寒い嵐といった、女心のように変わりやすい、ジェノヴァで初めて迎える冬が――やって来た。だが、親友を装いながらも心の中は恋敵であったマットとぼくは、ヴィ

コロ・バルバ(9)での下宿生活をだらだら続けていた。それでもなお彼女は、破滅をもたらす手練手管とさらなる破滅をもたらす美しさとで、ぼくらを引きつけてやまなかった。ところが、この恐ろしく惨めな、宙ぶらりんの状態にもはや我慢できなくなる日が、とうとうやって来た。ぼくは語気を強めて、今日の太陽が沈む前に、必ず判決を言い渡してもらうぞ、と言った。二人のどちらか一方を選んでもらわないといけない。ぼくの心を受け入れるか、さもなければ解放するか。こうなったらもう自棄のやん八だ。最悪の結果になるか、最高の結果になるか、行き着く所まで行ってやる。最悪ならば、ジェノヴァとも、君とも、これまでやってきた仕事や人生の高邁な目標とも、すぐさまオサラバだ。また新たな渡世を送るだけだ。このように、ぼくは激烈な口調で彼女に言ったのである。店の奥の小さな客間で彼女の前に立ち、そう言ったのは十二月の寒々とした、ある朝のことであった。

「君がマットの方を好きなのなら、そう言ってくれ、ひと言で。ぼくはもう二度と君を悩まさないよ。彼は愛される価値があるのに対して、ぼくは嫉妬深い、情け容赦もない男さ。彼は女のように疑うことを知らない、自分本位に考えない男だよ。はっきり言ってくれ、ジアネッタ。ぼくは君に永久の別れを告げなきゃいけないのかい？　それとも、故郷のイングランドにいる母に手紙を書いて、ぼくの妻になることを約束してくれた女性に、神様が祝福してくださるように祈ってくれって、そう言ってもいいかい？」

「あんたって、友だちの弁護がお上手ね」と、彼女は横柄な口調で言った。「マテオは感謝しなきゃいけないわ。こんなこと、あんたのためにしてくれなかったんだから、あの人は」

「はっきり答えてくれ、後生だから。そして、ぼくを帰らせてくれ！」

「帰ろうが、留まろうが、お好きなように、イギリス人さん。あんたの看守じゃないわよ、わたし」

「ぼくに立ち去れって言うのか？」

「まあ、あきれた！(10)どうして、わたしが？」

「留まったら結婚してくれるのか？」

彼女は大声で笑った――銀の鈴の音よろしく、とても陽気で、茶化したような、音楽的な笑いだった。

「質問ばかりするわね」

「この六、七ヶ月、君に誘導されて、こんなに期待するようになったんじゃないか！」

「それって、マテオが言ってることと全く同じだわ。なんて退屈な男なの、二人とも！」

「ああ、ジアネッタ」と、ぼくは激怒して言い返した。「少しは真面目に話してくれよ！ぼくは荒くれた男さ、確かに――君にふさわしい善良さも、聡明さも、全く持ち合わせちゃいない。だがね、心の底から君のことを愛してるんだ。皇帝だって、こんなに愛せやしな

いぞ」

「嬉しいわ。そんなに愛してほしくないなんて、思ってやしないわよ」

「それなら、みじめな思いをさせたくないはずじゃないか！　ぼくに約束してくれるのかい？」

「何も約束しやしないわよ、わたし」と彼女は言って、また急に笑い出した。「マテオと結婚しないってことを除いてはね！」

マテオと結婚しないことを除いてだって！　たったそれだけだった。ぼくには希望の「き」の字も言ってくれないのだ。ぼくの親友をただ非難するだけである。そんな非難からでも、ぼくは慰めや、自分が勝ったという利己的な喜びや、ある種の浅ましい自信を得ることが可能なら、得ようとしたかもしれない。いや、実際、恥ずかしいことに、そうしてしまったのである。ぼくは見せかけだけの好意に飛びつき、（ああ、なんて愚かだったことか！）確たる返事ももらえないまま、彼女に再度はぐらかされてしまったのだ。その日から、ぼくは自分を抑える一切の努力をやめてしまい、盲目的に我が身を漂流させた――破滅に向かって。

ついに、マットとぼくの関係がひどく悪化し、まるでパックリと口を開けた亀裂が二人の間に見えるかのようであった。お互いに相手を避けるようになり、一日に交わす言葉は十回にもならず、これまで育んできた習慣も全部なくなってしまった。この頃からであろ

うか――思い出しても身震いするが――彼のことを時として憎いと思うようになった。

こうして、ぼくらの間に生じた難儀な亀裂は、日毎に深く広くなって行った。ひと月ないし五週間がまた経過して二月になった。二月とともに謝肉祭(カーニヴァル)(11)を迎えた。ジェノヴァの人たちによれば、その年の謝肉祭は盛り上がりに欠けたそうである。確かにそうだった。というのも、いくつかの主要道路には旗が一、二本しか掲げられておらず、あとはお祭りらしい装いが女性たちに少し見られた程度で、それ以外に謝肉祭のシーズンを特に示すようなものはなかったからである。二日目のことだったと思うが、午前中ずっと汽車で路線に出ていたあと、日暮れ時にジェノヴァに戻ってみると、びっくりしたことに、マット・プライスがプラットホームに立っていた。彼はつかつかと歩み寄り、ぼくの腕に手を置いて次のように話しかけてきた。

「遅かったな。四十五分ほど待ってたんだぞ。今晩、一緒に食事でもどうかね？」

ぼくは一時の感情に駆られやすい男だったので、このようにまた好意を示されると、すぐに昔のよい感情を呼び起こされた。

「マット、嬉しいよ。〈帆かけ船(ゴッソーリ)〉に行くかい？」

「いや」と、彼はあわてて言った。「どこかもっと静かな場所――話のできる場所がいいな。ちょっと話したいことがあるんだ」

そのとき、ぼくは彼が青白い顔をして動揺しているのに気づき、次第に不安で落ち着か

なくなった。ぼくらはモロ・ヴェッキオ(12)に近い〈太公望(ペスカトーレ)〉という場末の小さな大衆レストランへ行くことに決め、船乗りたちの溜(た)まり場となってタバコの香りが漂っている、その薄汚れた特別室で簡単な食事を注文した。マットはひと口も喉(のど)を通らない様子で、すぐにシチリア・ワイン(13)を一本注文し、がぶがぶ飲んでいた。

「それで、マット」最後の料理がテーブルに置かれると、ぼくはそう切り出した。「どんな話かね？」

「悪い話さ」

「君の顔色から判断して、そう思ってたよ」

「君にとっても、ぼくにとっても、悪い話なんだ。ジアネッタのことさ」

「ジアネッタがどうした？」

いらだっているように彼はサッと片手で唇をぬぐった。

「ジアネッタは不実な女だ――不実どころか、もっと悪い女だ」と、彼はしゃがれた声で言った。「彼女は、ちょうど髪につける花のように、正直な男の心を値踏みしてるんだ――一日ぽっきりの使用で、あとはポイ捨てさ、永久にね。ぼくら二人とも、ひどい虐待を受けてたってわけだよ」

「どんな方法で？　くそっ、はっきり言ってくれ！」

「女が自分を愛してくれる男どもを虐待し得る最悪の方法だ。こともあろうに彼女は我

が身をロレダーノ侯爵に売りやがったのさ」

烈火のごとく怒りの血がほとばしり出て、頭と顔がカーッとなり、ほとんど何も見えなくなって、まともに話ができない状態であった。

「彼女が大聖堂の方へ行く姿を見たのは」と、彼は急いで話を続けた。「三時間前ぐらいだったよ。司祭の所へ懺悔(ざんげ)でもしに行くのかと思い、後ずさりして遠くから彼女のあとを付けてみたんだ。でもね、彼女は大聖堂に入ると、あの男が待ってる説教壇の裏手へ真っ直ぐ行ったよ。あいつのことは覚えてるだろ――一、二ヶ月前よく店に入り浸ってた老人さ。で、やつらが教会堂の方に背を向けて、説教壇の下でぴったり寄り添い、喋々喃々(ちょうちょうなんなん)としてる姿を見ると、ぼくはカーッと頭にきてね、何かするか何か言ってやろうと思って、真っ直ぐ教会堂の側廊を歩いて行ったんだよ。具体的に何かは分からなかったけど、とにかく、自分の腕に彼女の腕を通させ、家に連れて帰るつもりだった。でもね、すぐ近くまで行くと、やつらとの間に大きな柱があるのに気づいたんで、立ち止まったんだ。やつらからはこっちの姿が見えないし、こっちからもやつらの姿が見えなかったけど、声ははっきり聞こえたよ。で――それで、ぼくは聞き耳を立ててたのさ」

「それで、君が聞いた内容は――」

「恥ずかしい取引条件さ――片方が美しさを、もう片方が金を出すってわけ。一年に数千フラン、ナポリの近くに別荘――チェッ！　繰り返して言うだけで胸くそ悪いや」

ここで彼はブルッと身震いし、またグラスにワインを注ぎ、一気に飲み干した。

「そのあとはもう」と、ほどなく彼は話を続けた。「彼女を連れ去ろうなんて考えはなくなっちまったよ。すべてが血も凍るような、計画的で破廉恥なことだったんで、ぼくとしては彼女を記憶からぬぐい去り、彼女の運命に任せりゃいいような気になったのさ。で、大聖堂をそっと抜け出し、長い時間、海のそばを歩きまわりながら、自分の考えを整理しようとしてたんだよ。それから、君のことを思い出したのさ、ベン。この浮気女がぼくらの仲を裂き、生活を滅茶苦茶にしたことを思い出すと、気が狂いそうになったぜ、まったく。それで、駅まで来て君を待ってたわけさ。君にも事の始終を知ってもらわないといけないと考えてね。で、たぶん、ぼくらは一緒にイングランドへ帰った方がいいんじゃないかって思ったんだ」

「ロレダーノ侯爵か！」

ぼくにはそれしか言えなかったし、それしか考えられなかった。マットが自分自身について言ったように、ぼくは「茫然自失の体」であった。

「実はもう一つあるんだ、君に話しておいた方がいいと思うことが」と、彼は気が進まないといった口調で付け加えた。「女というものがどれほど不実になり得るものか、それだけを君に教えるためであってもね。来月、ぼくら――ぼくらは結婚する予定だったんだよ」

「ぼくらって？　誰のことだい？　どういうことだ？」
「つまり、ぼくらは結婚することになってたんだ――ジアネッタとぼくさ」
このとき突然、ぼくは嵐のような激怒と軽蔑と不信に襲われ、思慮分別を吹き飛ばされるような、そんな感じがした。
「君が！　ジアネッタが君と結婚するのか！　信じられん！」
「ぼくも信じなきゃよかったと思うよ」彼は顔を上げて答えたが、ぼくの激しい口調に戸惑っているようだった。「でもね、彼女はぼくに約束してくれたんだ。その時は本気だと思ったよ」
「何週間か前、君の妻には絶対にならないって、そう彼女は言ってたぞ！」
彼の顔が紅潮して顔つきが暗くなったが、次に出た彼の返事は最初の返事と同じように落ち着いたものだった。
「へーえ！　それじゃ、卑劣な行為がもう一つあったってわけか。彼女は君の求婚を断ったと言ってたぜ。だからこそ、ぼくたちの婚約を秘密にしてたんだよ」
「嘘を言うな、マット・プライス」と、ぼくは彼に対する疑いのあまり、ほとんど我を忘れて叫んでしまった。「すべてデタラメだと言いやがれ。はっきりと言え、この野郎！自分は失敗したくせに、ジアネッタが言うことを聞かないもんで、ぼくの方が成功するかもしれんと、そう思ってるんだろうが！　たぶん、ぼくは成功するさ――たぶん、どっち

みち、成功するのはぼくの方さ」

「気でも狂ったのか？　どういう意味だ？」

「ぼくをイングランドへ帰らせるためのトリックだってことさ――おまえの話なんか、ひと言だって信じるもんか。この嘘つきめ、大嫌いだ！」

彼は立ち上がって、椅子の背に片手を置き、ぼくの顔を厳しい目つきで見ていた。

「君がベンジャミン・ハーディでなけりゃ」と、彼はゆっくりと言った。「ぶん殴って半殺しにしてやりたいところだ」

その言葉が彼の口から出るや、ぼくは彼に飛びかかった。そのあと起こったことについては、はっきりと思い出すことができない。呪い――殴り合い――取っ組み合い――理性では抑えられない一瞬の激怒――ワーッという叫び――ガヤガヤとした騒ぎ――ぐるりと取り巻いた見知らぬ人たちの顔。それから、目に見えるのは倒れて野次馬の腕に抱えられたマットと、ぶるぶる震えながら、うろたえている自分自身の姿。握り締めた手から落ちたナイフ、床に流れた血、ぼくの両手についた血、彼のシャツについた血。そのあと聞こえたのは、次のような恐ろしい言葉であった。

「ああ、ベン、殺りやがったな！」

とはいえ、彼が死ぬことはなかった――少なくとも、その時その場では。彼は最寄りの病院に運ばれ、数週間、生死の狭間をさまよっていた。非常に危険な状態で予断を許さな

いということだった。ナイフはちょうど鎖骨の下まで刺さって、両方の肺に達していたそうである。話すことも寝返りを打つことも許されず――ほとんど自由に呼吸もできない。水を飲むのに頭を持ち上げることさえできない。この悲しい時の流れの間ずっと、ぼくは昼夜を分かたず彼のそばに座っていた。鉄道の勤め口はやめてしまった。ヴィコロ・バルバの下宿も引き払い、ジアネッタ・コネグリアのような女がいたことを忘れようとした。それはマットのことだけを考えた生活であったが、彼もまた自分のためではなく、ぼくのために生きようとしてくれたようだ。しかし、ぼく以外に誰も彼の口に手で触れたり、彼の枕を直したりする人がいないという、そういう心痛と後悔で居たたまれない時間を過ごしていると、昔の友情がよみがえり、相手を信頼する誠実な気持ちが以前よりもずっと強くなった。彼は自ら進んで、ぼくを完全に赦してくれたのだ。ぼくは感謝のあまり、彼のためであれば命を投げ出してもよいと思ったほどである。

ついに、ある晴れた春の朝、彼が回復期の患者として退院を許可され、ぼくの腕に寄り添いながら、幼児のような弱々しい、おぼつかない足取りで病院の門から出ることになった。彼の怪我は完治したわけではない。そのとき、彼が完治することはあり得ないと聞かされ、ぼくは恐怖と苦悩のどん底に突き落とされた。ちゃんとした介護があれば、数年は生きることができるかもしれないが、肺は治療の見込みがないほど傷ついているので、彼が再び体力や健康を取り戻すことは絶対にないだろう。これは主治医が脇を向いて話して

くれた別れの言葉である。一刻も早く彼をもっと暖かい南の方へ連れて行くように、ということであった。

ぼくは、ジェノヴァの向こう約三十マイルにあるロッカ(14)という小さな海岸町――海が空よりもずっと青い、切り立った崖がサボテンやアロエやエジプト椰子(やし)といった不思議な南国の植物で青々した、そうしたリヴィエラ地方(15)の人里はなれた、さびしい場所に彼を連れて行った。ここで、ぼくらは小売店主の家に下宿して、マット自身の言葉を借りるなら、彼は「回復するという仕事に本腰を入れて取りかかる」ことにした。だが、悲しいかな、それはどんなに本腰を入れても捗(はかど)るような仕事ではなかった。来る日も来る日も彼は浜辺まで下りて行き、そこに何時間も座って海の空気を深く吸ったり、沖合いを行き来する帆船をじっと見つめていた。やがて家の庭から先へは歩いて行けなくなってしまった。開いた窓のそばの寝椅子で毎日を過ごし、自分の最期を忍耐強く待つようになったのである。ああ、自分の最期をだ！　すでに彼の終焉が近づいていた。彼は急に衰えてしまい、夏の終わりとともに人生の終わりに近づき、死神(リーパー)(16)がすぐ近くまで来ていることを意識していたようである。今や彼の目的は、ぼくの良心の呵責による苦悶を和らげてやり、やがて訪れるに違いない死期に対して、ぼくに心の準備をさせることだけになった。

「これ以上もう長く生きるつもりはないよ、たとえできてもね」ある夏の日の夕べ、彼は寝椅子に横になったまま、星を見上げながら言った。「この瞬間に自分の好きなように

できるなら、今すぐ逝くことを願うよ。ジアネッタには、ぼくが赦したということを知ってもらいたいな」

「彼女には知らせてやるよ」と、ぼくは頭から足まで突然ぶるぶると震えながら答えた。すると、彼はぼくの手をギュッと握った。

「それから、ぼくの父に手紙を書いてくれるかい？」

「ああ、書くよ」

ぼくは、頬を伝って雨のように流れる涙を見られないように、少し後ろに引き下がっていたが、彼は肘をついて体を起こし、ぐるりとこちらの方を見た。

「気をもむなよ、ベン」そう彼はささやき、ぐったりと枕に頭を戻して――そして逝ってしまった。

これで一巻の終わり、これがぼくの人生を人生たらしめていたものの結末であった。ぼくは彼をその地域の、見知らぬ海の波頭が見知らぬ岸辺に打ち寄せる音の聞こえる場所に埋葬してやり、司祭と会葬者たちが帰るまで墓のそばにたたずんでいた。墓堀り男が墓穴に最後の土をかぶせて足で踏み固めると、ぼくはやっとマットを――ぼくが愛して、憎んで、殺してしまった親友を――永久に失ったことに気づいた。やっとのことで、ぼくにとって心の安らぎ、喜び、希望であったものがすべて消滅したことに気づいたのである。この瞬間から、ぼくの心はかたくなになり、自分の生活がいやでたまらないものになった。昼

も夜も、陸上にいようが海上にいようが、働いていても休んでいても、食事中も睡眠中も、いやでたまらなかったのだ。これはカイン[17]の呪いであった。だから、弟が赦してくれたからと言って、呪いが弱まったわけではない。この世で気持ちが安らぐことなどはもはやなくなった。隣人に対する善意などは永久に枯渇してしまった。自責の念で穏和な性格になる人もいるそうだが、ぼくの場合は毒々しい性格になっただけである。すべての人間を忌み嫌い、とりわけ、二人の仲を裂いて人生を滅茶苦茶にしてしまった、あの女に対しては恨み骨髄であった。

彼女を見つけ出し、彼が赦したということを伝えるように、ぼくは命じられていた。しかし、そんなことをするくらいなら、ジェノヴァの港に行って、ガレー船を漕ぐ奴隷のサージ[18]の帽子と金属玉のついた鎖を身にまとい、公共事業の苦役をさせられた方がましだと思った。それにもかかわらず、ぼくは彼の命令に従い、できるだけのことはしてやるつもりだったので、ひとりぽつねんと徒歩で戻って行った。「ジアネッタ・コネグリア、彼は君を赦してくれたが、神は決して赦さないぞ」と、彼女に言うつもりで戻ったのだが、彼女はいなかった。例の小さな店は別の人が借りて住んでいた。隣近所の人たちに分かっていたのは、母と娘が店を引き払って忽然と姿を消したということだけで、どうやらジアネッタはロレダーノ侯爵の「めかけ」になったらしいということだった。ぼくがあちこち訪ねてまわったこと――彼らがナポリに行ったと耳にしたこと――不安のあまり自分の勤務時

間などは意に介さず、船賃の代わりにフランスの蒸気船に乗って働きながら彼女を追いかけたこと――今では彼女のものとなっている豪華な別荘を探し出したものの、彼女は十日ほど前に屋敷を出て、侯爵が両シチリア王国[19]の大使として赴任しているパリへ行ってしまったこと――またマルセイユまでの船賃の代わりに船の中で働き、そこから一部は川をさかのぼり、一部は鉄道でパリに向かったこと――パリでは来る日も来る日も街路や公園を歩きまわって、大使館の門を見張り、大使の馬車を追跡し、数週間待ってやっと彼女の住所を突き止めたこと――会見を求めて手紙を書いたが、召使たちに扉の所から追い返され、手紙を顔に投げつけられたこと――彼女の部屋の窓を見上げ、ぼくは赦してやるどころか、考えられるかぎりの毒舌によって、憎悪に満ちた悪態を真剣についたこと――そうしたあと、パリの埃(ほこり)を足から払い落とし、[20]世界中をさまよう流浪の民となったこと――こういった事実については、残念ながら今ここで詳しく述べる紙面がない。

その後の六年から八年の間、ぼくの生活はたえず変化して不安定だった。ぼくは仏頂面で落ち着きもなかったが、あちこちで仕事の機会があれば、その仕事に就いた。いろんなことに手を染め、仕事が厳しくて異動がひっきりなしであるかぎり、稼ぎなどはほとんどお構いなしであった。最初、ぼくはマルセイユとコンスタンチノープルの間を定期的に往復するフランスの蒸気船の一つに乗り込み、主任技師として働いた。コンスタンチノープルではオーストリアのロイズ船舶[21]の一つに移って、しばらくはアレクサンドリアやヤッ

ファ[22]といった地域と往復しながら仕事をしていた。そのあとは、カイロでレヤード氏[23]の一行に加わり、ナイル河をさかのぼって、ニムルド遺跡の発掘でひとしきり働いた。それから、アレクサンドリアとスエズ間の新しい砂漠鉄道で現場の技師となり、やがて運賃の代わりに船の中で働きながらボンベイに行き、機関車の整備工としてインドの大きな鉄道会社の一つに勤めた。インドには割と長くいた。すなわち、ぼくにとっては長期間と言えるが、ほとんど二年ほど滞在したのだ。ちょうどそのころ、ロシアに対して布告された戦争[24]がなかったなら、あんなに早く帰国することはなかったかもしれない。ぼくの心は戦争に引きつけられた。というのは、普通の人が安全と安心を求めるように、ぼくは危険と苦難を求めたからである。自分の生命については未練などなく、いつでも喜んで捨て去ったことであろう。そういうわけで、ぼくは真っ直ぐ英国に舞い戻り、ポーツマスに直行した。推薦状があったので、そこでは求めていた種類の仕事がすぐ手に入った。そして、ぼくは帝国軍艦の一つに乗り込み、その機関室で働きながらクリミア半島へ向かったのである。

　戦争が続いている間は、もちろん、ぼくは海軍に勤務していたが、戦争が終わると自由の身になり、また流浪の民となった。今度はカナダに行き、アメリカの開拓前線の近くで当時建設中だった鉄道で働いてから、ほどなく国境を越えて合衆国に入った。そして、北から南へ旅し、ロッキー山脈を越え、新金鉱地で試しに一、二ヶ月ほど生活してみた。[25]

だが、遠く離れたイタリアの海岸に放置したままの、あの墓を再訪したくて居ても立ってもいられないという説明しがたい気持ちに突如として襲われ、ぼくはもう一度ヨーロッパへと向かった。

かわいそうな小さい墓！　墓には雑草が生い茂り、十字架は半分ほど壊れ、墓碑銘も半分は消えかかっていた。マットを愛している者や彼のことを記憶している者が誰もいないかのようだ。ぼくらが一緒に下宿していた家にも行ってみた。そこには同じ人たちがまだ住んでいて、ぼくを心から歓迎してくれた。数週間、彼らの所に滞在しながら、ぼくは自分自身の手で雑草を取り、花を植え、墓の形を整え、純白の大理石でできた新しい十字架を建てた。そこに彼を埋葬して以来、ぼくは心の安らぎから遠ざかっていたが、そのとき久しぶりに安らぎを覚えた。それでやっとナップサックを肩にかけることができた。そして、人生が終わりに近づいた時に、神の思し召しがあれば、ぼくは這(は)ってでもロッカに戻ってきて、親友のそばに埋葬してもらおうと自分自身に誓いを立て、また世間との戦いに出向いたのである。

この時から、以前のように遠くの地域へ心が傾くことはなくなり、むしろ例の墓の近くに留まりたい気持ちが強くなった。それで、ぼくはマントヴァ(26)より遠くへは行かず、この町で仕事に就いた。それは当時完成して間もないマントヴァとヴェネツィアを結ぶ鉄道の機関士の仕事だった。ぼくは蒸気機関の整備の訓練を受けていたにもかかわらず、どう

いうわけか、この頃は機関車本体を運転することでパン代を稼ぎたくなっていた。運転に伴う興奮、力動感、疾風のような速さ、轟音をたてる罐焚(かまた)きの火、飛ぶように過ぎ去る景色は何とも言えず、とりわけ、夜行の急行列車の運転は楽しかった。天候が悪ければ悪いほど、ぼくの不機嫌な気質とは相性がよかった。なぜなら、ぼくは以前のように、いや以前よりも情け容赦ない性格になっていたからである。長い年月はぼくの性格を穏和にしてくれなかった。ぼくの心の中にある最も邪悪で辛辣なものをすべて強めただけであった。

ぼくはマントヴァ鉄道で割と誠実に仕事を続けていた。今から話すようなことが起こったのは、そこで七ヶ月以上しっかりと働いた頃のことであった。

それは三月のことである。数日間ほど天気が不安定で夜は嵐になった。そのため、鉄道のある地点で――ポンテ・ディ・ブレンタ[27]の近くだが――川が増水して、築堤が約七十ヤードほど洗い流されてしまった。この事故のせいで汽車はすべてパドヴァ[28]とポンテ・ディ・ブレンタ間のある地点で停車しなければならなくなった。乗客も荷物を抱え、そこから田舎の迂回路を通って、決壊した部分の反対側にある最寄りの駅（別の列車が待機している駅）まで、ありとあらゆる輸送手段で運んでもらわないといけなくなった。もちろん、これが原因で不平不満とともに大混乱が起こり、時刻表はすべて狂ってしまい、一般乗客は多大な不便を強いられた。ほどなく、現場に大勢の土方(どかた)が特別に派遣され、決壊部分を修復するために昼夜を徹して働いてくれることになった。

このころ、毎日ぼくは二本の直通列車を運転していた。つまり、一本は朝早くマントヴァからヴェネツィアまで行く列車、もう一本は午後にヴェネツィアからマントヴァまで帰る列車である。それは、およそ百九十マイルの道のりを走破し、十時間から十一時間もかかってしまう丸一日の仕事だった。だから、事故の三日目か四日目に、通常の仕事の割当に加え、その晩はヴェネツィアまで特別列車を運転してくれと言われた時は、さすがにいい気分がしなかった。この特別列車は機関車とたった一台の車両と有蓋貨車からなり、夜の十一時にマントヴァの駅を出ることになっていた。乗客たちがパドヴァで降りると、そこには彼らをポンテ・ディ・ブレンタまで運んでくれる駅馬車が待機しているということであり、ポンテ・ディ・ブレンタでは別の機関車と車両と有蓋貨車の準備ができているので、ぼくはずっと乗客たちに随行することを命じられた。

「大変だな！」(29)と、ぼくに命令を伝えた事務員が言った。「そんなにムッとするなよ、おまえ。チップをたんまりもらえるぞ、きっと。知ってるか、誰を乗せるか？」

「知るもんか！」

「知るもんかだと！　おい、ナポリの大使、ロレダーノ公爵だぞ」

「ロレダーノだって！」どもった声でぼくは叫んだ。「ロレダーノ何だって？　侯爵ってのはいたけど……」

「確かにな。数年前まではロレダーノ侯爵だったんだが、そのあと公爵を受け継いだん

だ」(30)

「今ではずいぶん年を取ってるはずだが……」

「そうだ、年寄りさ。だが、それがどうした？　昔みてえに、ピンピンして元気一杯、かくしゃくたるもんだ。前に会ったことがあるのか？」

「ああ」と、ぼくは顔をそむけて答えた。「会ったことはあるよ――何年も前だ」

「結婚したってことは聞いたかね？」

ぼくは首を振った。

事務員はクスッと笑い、両手をすり合わせ、肩をすくめた。

「とんでもねえこった。結婚した時は、おまえ、すげえスキャンダルになったんだぞ。なにせ、結婚したのがめかけだからな――品のねえ低俗な娘――ジェノヴァの娘――すげえ別嬪さんだそうだが、もちろん、誰にも相手にされとりゃせんよ。遊びに行くもんなんぞ、おりゃせんのだから」

「彼女と結婚しただって！」と、ぼくは叫んだ。「あり得ない！」

「嘘じゃねえ、ホントだぜ」

ぼくは頭に手を置いたが、それは落下物が当たったか、殴打されたかと思ったからだ。

「今晩、彼女は――彼女は来るのか？」と、ぼくはどもりながら尋ねた。

「ああ、来るさ――あの旦那とだったら、どこへだって行くさ――絶対、見失わねえよう

にしとるそうだからな。おまえ、会えるぞ、今晩――名花（ラ・ベラ）の公爵夫人に！」

ぼくに命令を告げた男は、こう言いながら笑い、再び手をすり合わせてから、事務所に戻って行った。

その日は過ぎて行ったが（どのようにかは、ほとんど覚えていないが）、ぼくの心はすっかり激怒と憤慨とで乱れていた。ぼくは七時二十五分頃に午後の仕事から戻り、十時半にはまた駅で働いていた。機関車の点検をし、火夫（フォキスタ）――すなわち機関助手――に罐焚（かまた）きについての指示を与え、入念に油を差し、すべての準備を整えてから、ちょうど自分の懐中時計と切符売場の時計を合わせようとしていたとき、ぼくの腕に誰かが手を置いて、次のような言葉を耳につぶやいてきた。

「このあと特別列車を運転する機関士は、あんたかね？」

この男と以前に会ったことはなかった。喉（のど）のあたりまで外套で身を包んだ小柄な浅黒い男で、青い眼鏡をかけ、大きな黒い顎髭（あごひげ）をたくわえ、帽子を目深にかぶっていた。

「どうやら、貧乏みたいだな」と、その男は関心を寄せるように素早くささやいた。「他の貧乏人と同じで、暮らし向きをよくするのに異存はなかろうな。金貨で二千フロリン(31)かせぎたくないかね？」

「どうやって？」

「シッ！　パドヴァで停車して、それからまたポンテ・ディ・ブレンタで別の列車を発

車させることになってるんだな?」
ぼくはうなずいた。
「もし、そのことを全然あんたが知らないとしたら――仮に、蒸気を止めずに、機関車から飛び降りて、そのまま列車を走らせたとしたら?」
「とんでもない。七十ヤードも築堤がなくなってるし、それに……」
「もういい! 知ってるさ。自分だけ助かって、列車をそのまま走らせろ。なに、単なる事故ってことになるさ」
体が熱くなったかと思うと、急に冷たくなり、ぼくはぶるぶると震えた。心臓の鼓動が速くなって呼吸が乱れるのを感じた。
「どうして、ぼくをそそのかすんだ?」声も震えていた。
「イタリアのためだ」と、彼はつぶやいた。「自由のためさ。あんたはイタリア人じゃない。だが、それでも同士にはなれるさ。このロレダーノという男は我が国の不倶戴天の敵なんだ。ちょっと待て、ここに二千フロリンあるぞ」
ぼくは彼の手を激しく押し返した。
「だめだ――だめだ。殺人の謝礼金なんか。もしやるとしたら、イタリアのためでも金のためでもなく、復讐のためだ」
「復讐のためだって!」その男はオウム返しに言った。

そのときプラットホームへ機関車をバックさせよという合図が出た。それで、それ以上ひと言もしゃべらずに、ぼくは機関車の持ち場にサッとついた。見知らぬ男が立っていた場所を振り返って見ると、もう姿を消したあとだった。

乗客たち――公爵と公爵夫人、秘書と司祭、従者と女中――が所定の位置についているのが見える。駅長が二人にお辞儀をして車両に乗りこませ、帽子を脱いで扉のそばに立っている。彼らの顔は識別できなかった。プラットホームが暗すぎて、機関車の罐焚きの火がギラギラとまぶしかったからである。だが、彼女の堂々とした姿形、頭の構えははっきりと認識できた。彼女が誰であるか教えてもらわなかったとしても、その特徴だけで彼女だと分かっただろう。それから車掌のかん高い笛が鳴り、駅長が最後のお辞儀をした。ぼくが栓を開いて蒸気を出すと、汽車は動き始めた。

ぼくの血は煮えたぎっていた。ためらう気持ちも体の震えももう消えていた。神経という神経が鋼鉄のようになり、脈を打つごとに恐ろしい決意があふれるような気がした。生殺与奪の権を握った以上は、彼女に復讐せずにおくものか。彼女には死んでもらおう――ぼくが親友の血潮で自分の魂を染めたのは、この女のためだったんだ！　絶対に死んでもらうぞ、富と美の絶頂の中で。この世のどんな力をもってしても、彼女を救えるもんか！

汽車は飛ぶように駅を次々と通り過ぎて行く。もっと栓を開いて蒸気を出してやろう。火夫には、どんどんコークス(32)を入れて、燃えさかるコークスの塊をかき回すように命令

した。突風よりも速く進みたい――そんなことが可能であれば。どんどん速度を増すと、生け垣や樹木が、橋が、駅が瞬く間に過ぎ去って――村が見えたかと思うと、すぐに消え去り――電線がよじれて、上下に揺れて、一つにからまってしまう。それほど汽車の速度は恐ろしいものだった。どんどん速度を増すと、そばにいた火夫はとうとう真っ青な、おびえたような顔になり、それ以上の燃料を罐焚きに使うのを拒否した。どんどん速度を増すと、強風がぼくらの顔に当たって、口から出る息が押し戻されるほどだった。

ぼくは自分自身が助かることなど考えもしなかった。残りの者たちと一緒に死ぬつもりであった。ぼくは気が狂っていたが――心底、その時は完全に発狂していたと思っているのだが――老公爵と供の者たちには、一瞬だが憐れみで心が痛んだ。できることなら、ぼくの隣にいた哀れな男の命も助けてやりたかったのだが、その時の汽車の速度では脱出も不可能であった。

ヴィチェンツァ(33)を通過。それは見分けがつかない灯火の光景にすぎなかった。ポイアナ(34)が飛び去って行く。たった九マイルしか離れていないパドヴァで、乗客たちは汽車を降りることになっている。いさめるような顔で火夫がぼくの方を見ているではないか。彼の唇が動いているが、ひと言も聞こえない。いさめるような彼の表情が突如として死の恐怖に変わるのが見えた、その瞬間――ああ、ありがたい！　その時になってやっと、機関車に乗っているのは、彼とぼくの二人だけではないことが分かった。

なんと、そこに第三の男がいたのだ。火夫がぼくの左手に立っていたのとは逆に、その男は右手に立っていた。背の高い頑強な男である。頭は短い巻き毛で、スコットランドの平たい帽子をかぶっている。ぼくが最初ギョッと驚いて後ろに下がると、その男は一歩近づいてから、代わりに運転席について蒸気を止めた。ぼくが口を開いて話しかけると、その男はゆっくりと振り返り、ぼくの顔をじっと見つめていた。

マシュー・プライスだ！

ぼくは気が狂ったような長い叫び声をあげ、狂ったように両手を頭上に振り上げ、まるで斧で強打されたかのように倒れてしまった。

ぼくの話に対して、いろいろ反論されることは覚悟している。当然のことながら、それは目の錯覚なのだとか、精神的な圧力を受けて苦しんでいたのだとか、はたまた、一時的に狂気に襲われたのだとか言われることは予期している。そうした主張はすべて今までに何度も聞いたことがあるので、こう言っても許されるのなら、そんなことはもう聞きたくない。この問題についての考えは、ぼくの場合、もう何年も前に結論が出ているのだ。ぼくに言えるのは――ぼくに分かるのは――ただ――マシュー・プライスは霊界からよみがえり、ぼくが罪深い激怒に襲われて、もう少しで破滅に駆り立てるところだった人たちの命だけでなく、ぼく自身の魂も救ってくれたということだ。このように思う理由は、神の慈悲と悔い改めた罪人が赦されることを信じているからである。

【訳注】

(1) 人類の堕落に怒ったエホバ（旧約聖書の神）が地上に大洪水を起こしたが、ノアだけは命令に従って箱船を作り、家族とすべての動物をつがいで乗せて洪水を逃れた（「創世記」六～八章を参照）。

(2) 古代ケルト族の間でキリスト教伝来以前に信仰されたドルイド教の祭司。当時は最高の学者で、予言や魔術を行ない、裁判官であると同時に民族的な詩人でもあったが、四世紀頃に絶滅した。

(3) 工場の煤煙で黒くなっていたバーミンガムを中心とする大工業地帯。

(4) ピアモンテはイタリア北西部の州で、州都はトリノ。

(5) ムーア人はアフリカ北西部に住むイスラム教徒で、八世紀にイベリア半島に侵入し、十一世紀にはイスラム教国を建設した。ムーア様式の中庭の代表例はアルハンブラ宮殿で、そこでは池泉・噴水・柑橘系の植物をあしらった中庭がいくつも複雑につなげられている。

(6) 中世に地中海で用いられた帆と多数のオールを有する単甲板の大型船で、奴隷や罪人に漕がせた。

(7) ヴェネツィア派の画家ティツィアーノの『鏡を見る女』（本作品の扉絵を参照）。

(8) スー（sou）はフランスの昔の小銭で、五サンチーム銅貨。

(9) ヴィコロ（Vicolo）はイタリア語で「路地」の意。

(10) ベアタマドレ（Beata Madre）はイタリア語で「聖なる母」の意だが、ここでは感嘆表現。

(11) 四旬節（Lent）の直前の三日間の祝祭で、カトリック教国では四旬節中に肉食を断つので、その前

の謝肉祭には埋め合わせとして肉を食べて、仮装行列などをして浮かれ騒ぐ。

(12) モロ・ヴェッキオ（Molo Vecchio）はイタリア語で「古い防波堤」の意。

(13) 地中海最大の島シチリアは、古くからブドウ栽培が行われ、紀元前七世紀の絵画や文献にもワイン造りが記されている。

(14) ロッカ（Rocca）はイタリア語で「（山頂にある）城塞」の意。

(15) 地中海ジェノヴァ湾の沿岸地方で、フランス側のコート・ダジュールはその一部。風光明媚で知られ、冬期にはヨーロッパ各地からの避寒客が多い。

(16) 普通、骸骨が経帷子（きょうかたびら）をまとい、大きな草刈り鎌を持った姿で表される。

(17) ネズビット「約束を守った花婿」の訳注(10)を参照。

(18) 綾目が横糸に対して四十五度になっている毛織物。

(19) 一一三〇年にシチリアとナポリの合併によってできた王国で、一八六一年にイタリア王国に併合。

(20) 憤然として立ち去るという意味（新訳聖書の「マタイの福音書」十章十四節を参照）。

(21) ロイズ（Lloyd's）は一六八八年に創立されたロンドンの保険業者協会で、もともとは主に海上保険と海運ニュースに関わっていた。

(22) アレクサンドリアはアレクサンドロス大王が紀元前三三二年に建設させたナイル河デルタ上の港湾都市。ヤッファはイスラエル中部の旧港市で、一九五〇年にテルアビブと合併した。

(23) レヤード（Sir Austen Henry Layard）は英国の考古学者・外交官で、ニムルド（Nimrud）とニネ

ヴェ（Nineveh）の発掘で有名。

(24) 一八五三〜五六年にロシアと英国・フランス・トルコ・サルデーニャ間で起こったクリミア戦争。

(25) 一八四九年にカリフォルニア州などの新金鉱地へ人々が殺到したゴールドラッシュへの言及。

(26) イタリア北部のロンバルディア州の市。ローマの詩人ウェルギリウスの生誕地。

(27) パドヴァを流れるブレンタ川の近くにある古い村。

(28) イタリア北東部、ヴィチェンツァとヴェネツィアを結ぶ水路の中途点であり、中世から栄えた。ガリレオが教えた大学の所在地。

(29) イタリア語で「大酒飲み野郎（Corpo di Bacco）」だが、驚き・怒りの感嘆表現として使用される。

(30) 英国の貴族の爵位は五つで、上から順に公爵（Duke）、侯爵（Marquess）、伯爵（Earl）、子爵（Viscount）、男爵（Baron）。

(31) 一二五二年にフローレンス市紋章の（ユリの花の意匠模様の入った）金貨が発行されたが、それにならってヨーロッパ各地で発行された金貨や銀貨。イギリスでは一八四九年に発行された旧二シリング銀貨のこと。

(32) 石炭を乾留してできる多孔質の固体で、火力の強い燃料となる。

(33) ヴェネツィアの西にあるイタリアで最も重要な芸術の市。後期ルネサンスのアンドレーア・パッラーディオが独特の建築を遺し、ユネスコの世界遺産に登録されている。

(34) ヴィチェンツァとパドヴァの中間地点にある村。

【作品と作者について】

本邦初訳。ディケンズの雑誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』の一八六六年クリスマス特集号では、八つの短篇小説が『マグビー・ジャンクション』というタイトルのもとに掲載された。その最後の短篇がアミーリア・B・エドワーズ（Amelia Blanford Edwards）の本篇で、原題は「第五支線――鉄道員」（No. 5 Branch Line: The Engineer）であった。編集者のディケンズが最初の四つ、すなわち「バーボックス兄弟」（Barbox Brothers）、「バーボックス兄弟会社」（Barbox Brothers and Co.）、「本線――マグビーの少年」（The Boy at Magby）、「第一支線――信号手」（No. 1 Branch Line: The Signalman）を書いている。ちなみに、五番目はアンドリュー・ハリデー（Andrew Halliday）の「第二支線――鉄道機関士」（No. 2 Branch Line: The Engine-Driver）、六番目はチャールズ・コリンズ（Charles Collins）の「第三支線――補償ハウス」（No. 3 Branch Line: Compensation House）、七番目はヘスバ・ストレトン（Hesba Stretton）の「第四支線――旅行者用郵便局」（No. 4 Branch Line: The Travelling Post-Office）である。

アミーリア・エドワーズは、一八三一年六月七日にロンド

ンで、のちに銀行家となる英国陸軍士官の父とアイルランド人の母の間に生まれた。母から自宅で教育を受けた彼女は、子供時代から文才を発揮しており、最初の詩は七歳の時に、物語は十二歳の時に発表された。やがてディケンズの雑誌『ハウスホールド・ワーズ』や『オール・ザ・イヤー・ラウンド』、そして『サタデー・レヴュー』や『モーニング・ポスト』といった新聞に、彼女の詩、物語、記事が数多く掲載されるようになった。エドワーズの初期小説は世間に認められたが、彼女の小説家としての名声は重婚を扱った小説『バーバラの物語』(*Barbara's History*, 1864) で確立された。エドワーズは、一八七三年から七四年にかけての冬にエジプトを旅行し、この国の文化に魅了されてしまった。この時のナイル河の船旅を描いた『ナイル河の千マイル紀行』(*A Thousand Miles Up the Nile*, 1876) は即座にベストセラーになった。彼女は一八八二年にレジナルド・S・プールとともに「エジプト調査基金」を設立し、その後は文学的な創作活動をやめて、エジプト学だけに集中した。一八八九年から九十年にかけてアメリカ合衆国で講演旅行を行なったが、その時に腕を骨折してから健康が衰え始め、一八九二年四月十五日、独身のままサマセット州の保養地ウェストンスパーメアでインフルエンザが原因で亡くなった。彼女の希望によって、エジプト学の冠講座創設のために二千五百ポンドの現金が、そしてエジプト古代遺物のコレクションがロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジに寄贈された。